

ニ在留セル本國ノ官員ヘ引渡スヘシ

第七款

朝鮮國ノ沿海島嶼岩礁從前審檢ヲ經サレハ極メテ危險トナスニ因リ日本國ノ航海者自由ニ海岸ヲ測量スルヲ准シ其位置淺深ヲ審ニシ圖誌ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ航通スルヲ得セシムヘシ

第八款

嗣後日本國政府ヨリ朝鮮國指定各口ヘ時宜ニ隨ヒ日本商民ヲ管理スルノ官ヲ設ケ置クヘシ若シ兩國ニ交渉スル事件アル時ハ該官ヨリ其所ノ地方長官ニ會商シテ辦理セン

第九款

兩國既ニ通好ヲ經タリ彼此ノ人民各自己ノ意見ニ任セ貿易セシムヘシ兩國官吏モ之レニ關係スルヲナシ又貿易ノ限制ヲ立テ或ハ禁沮スルヲ得ス倘シ兩國ノ商民欺罔街賣又ハ貸借償ハサルコアル時ハ兩國ノ官吏嚴重ニ該通商民ヲ取糺シ債欠ヲ

追辦セシムヘシ但シ兩國ノ政府ハ之ヲ代償スルノ理ナシ

第十款

日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交渉スル事件ハ總テ日本國官員ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪科ヲ犯シ日本國人民ニ交渉スル事件ハ均シク朝鮮國官員ノ查辦ニ歸スヘシ尤雙方トモ各其國律ニ據リ裁判シ毫モ回護袒庇スルヲナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ

第十一款

兩國既ニ通好ヲ經タレハ別ニ通商章程ヲ設立シ兩國商民ノ便利ヲ與フヘシ且現今議立セル各款中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニスヘキ條件共自今六個月ヲ過スシテ兩國別ニ委員ヲ命シ朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議定立セン

第十二款

右議定セル十一款ノ條約此日ヨリ兩國信守遵行ノ始トス兩國政府復之レヲ變革スルヲ得ス以テ永遠ニ及ホシ兩國ノ和親ヲ固フスヘシ之レカ爲ニ此約書二本ヲ作り

チ

兩國委任ノ大臣各鈐印シ相互ニ交付シ以テ憑信ヲ昭ニスルモノナリ

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年二月二十六日

大日本國特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆印

大日本國特命副全權辦理大臣議官井上馨印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子二月初二日

大朝鮮國大官判中樞府事申摺印

大朝鮮國副官都摠府副摠管尹滋承印

○明治九年十月十四日第百廿七號布告

今般朝鮮國ト修好條規附錄並貿易規則別紙ノ通結約相成候條此旨布告候事

別冊

修好條規附錄

日本國政府曩ニ特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆特命副全

十五年五月十四號布告ノ以テ本規約アリ

權辦理大臣議官井上馨ナシテ朝鮮國江華府ニ詣ラシメ同國政府ハ大官判中樞府事申摺副官都摠府副摠管尹滋承ニ委任シ日本曆明治九年二月二十六日朝鮮曆丙子年二月初二日雙方互ニ調印シタル修好條規第十一款ノ旨趣ニ從ヒ日本國政府ハ理事官外務大丞宮本小一ニ委任シ朝鮮國京城ニ詣リ朝鮮國政府ハ講修官議政府堂上趙寅淵ニ委任シ相會同シテ議立スル條款左ニ開列ス

第一款

嗣後各港口駐留日本國人民管理官朝鮮國沿海地方ニ於テ日本國ノ諸船困難ニ遭ヒ緊急ナリト聞クトキハ地方官ニ告ケ該地ニ到ル道路ヲ經過スルヲ得ヘシ

第二款

嗣後使臣及管理官ヨリ各所へ通スル送文ハ自費ヲ以テ郵送スルモ或ハ該國人民ヲ雇ヒ專差スルモ各其便ニ從フヘシ

第三款

議定シタル朝鮮國通商各港ニ在リテ日本國人民地基ヲ租賃シ住居スルハ各其

チ

地主ト相議シテ價ヲ定ムヘシ朝鮮國政府ニ屬スル地ハ朝鮮國人民ヨリ官ニ納ルト同一ノ租額ヲ出シテ住居スヘシ釜山草梁項日本公館ニハ從前同國政府ヨリ守門設門ヲ設ケシカ今後之ヲ廢撤シ一ニ新定ノ程限ニ依リ標ヲ界上ニ立ツヘシ他ノ二港モ亦此例ヲ照ス

第四款

嗣後釜山港ニ於テ日本國人民行歩ヲ得ヘキ道路ノ里程ハ波戶場ヨリ起算シテ東西南北各直經十里朝鮮里法ニ依ルト定ム東萊府中ニ至テハ里程外ニ在リト雖モ特ニ往來ヲ爲ス此里程内ニ於テ日本國人民隨意行歩シ其地ノ物産及日本國物産ヲ賣買スルヲ得ヘシ

第五款

議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民ハ朝鮮國人民ヲ賃雇スルヲ得ヘシ朝鮮國人民其政府ノ許可ヲ得ハ日本國ニ來ルモ妨ナシ

第六款

十六年十一月號布告ヲ以テ行歩規程ヲ犯シタル者ノ處罰ニ方定ム參照スヘシ

議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民若シ死去シタル時ハ適宜ノ地處ヲ選ミ埋葬スルヲ得ヘシ但他ノ二港ノ埋葬地ハ釜山埋葬地ノ遠近ノ例ニ依ル

第七款

日本國人民日本國ノ諸貨幣ヲ以テ朝鮮國人民ノ所有物ト交換シ得ヘシ又朝鮮國人民ハ交換シ買得タル日本國ノ諸貨幣ヲ以テ日本國ノ諸貨物ヲ買入ル、爲メ朝鮮國指定ノ諸港ニテハ人民相互ニ通用スルヲ得ヘシ

第八款

日本國人民ハ朝鮮國銅貨幣ヲ使用運輸スルヲ得ヘシ兩國人民私ニ錢貨ヲ鑄造スル者アレハ各其國ノ法律ニ照シテ處斷スヘシ

第九款

朝鮮國人民日本國人民ヨリ買得タル貨物或ハ贈與ヲ受タル諸物品ハ隨意使用シテ妨無シ

修好條規第七款ニ載スル旨趣ニ從ヒ日本國測量船小船ヲ放チ朝鮮國沿海ヲ測

テ

量スル時或ハ風雨ニ逢ヒ或ハ干潮ノ爲メ本船ニ歸ル能ハサル時ハ該處里正ヨリ其近傍ノ人家ニ安着セシム可シ若シ需用ノ物品アラハ官ヨリ辨給シ後日其入費ヲ完清スヘシ

第十款

朝鮮國ハ未タ海外諸國ト通信セス日本國ハ年來諸國ト締盟友誼アルノ故ヲ以テ今後朝鮮國ノ沿海ヘ諸國ノ船舶風波ノ爲メ困難シ漂着スルアラハ朝鮮國人民理ニ於テ之ヲ愛恤セサル無シ該漂民本國ニ送還セラレンヲ望マハ朝鮮國政府ヨリ各港口駐留ノ日本國管理官ニ遞付シ本國ニ送還セシム該官員之ヲ領諾セサル無シ

第十一款

右十款ノ章程及之ニ添ヘタル通商規則共修好條規ト同一ノ權ヲ有ス兩國政府遵行シテ違フ莫カルヘシ然レトモ此各款中若シ兩國人民交際貿易上實地ノ障礙ヲ生シ改革セサル可ラサル事柄ヲ認ムル時ハ兩國政府其議案ヲ作り一箇年

前報知シテ協議決定スヘシ

大日本紀元二千五百三十六年明治九年八月廿四日

理事官外務大丞宮本小一印

大朝鮮開國四百八十五年丙子七月初六日

講修官議政府堂上趙寅熙印

朝鮮國議定諸港ニ於テ日本國人民貿易規則

第一則

日本國商船日本國政府所管ノ軍艦及專
ヲ通信ニ用フル諸船ヲ除ク朝鮮國ニテ許可セシ諸港ニ入津ノ時船主或ハ船長日本國人民管理官ヨリ渡シタル証書ヲ三日ノ内ニ朝鮮國官廳ヘ差出スヘシ

所謂證書ナル者ハ船主所持ノ日本國船籍航海公證ノ類ヲ入港ノ日ヨリ出港ノ日マテ管理官ニ差出シ置キ管理官ヨリ此證書類ヲ預リタル證票ヲ與

フ是ナ日本國現時施行ノ商船成規ト爲ス船主本港碇泊中此證票ヲ朝鮮國官廳へ差出シ日本國ノ商船タルヲ驗明ス

此時船主又其記録簿ヲ差出スヘシ

所謂記録ナル者ハ船名並ニ本船ヲ發スルノ地名積荷ノ噸數石數共ニ船舶ノ容積ヲ算定ス船長ノ姓名乗組水夫ノ人員船客ノ姓名ヲ詳記シテ船主調印シタル者ナリ

此時船主又本船積荷ノ報單并船内所用雜物ノ簿記ヲ差出スヘシ

所謂報單ナル者ハ積物ノ名或ハ其物質ノ實名并荷主ノ姓名記號番號ヲ詳記シテ記號番號ナキ積物ハ此例ニアラス報知スルナリ此報單及其他書類共何レモ日本國文ヲ用ヒテ漢譯文ヲ副ルヲ無シ

第二則

日本國商船進港ノ積荷ヲ陸揚ケセント欲スル時ハ船主或ハ荷主ヨリ更ニ積荷ノ物名并元價斤量個數ヲ書記シ朝鮮國官廳ニ届出ヘシ官廳届書ヲ得ハ速ニ荷

卸シ免狀ヲ渡スヘシ

第三則

船主或ハ荷主第二則ノ免狀ヲ得タルノ後其積物ヲ陸揚ケスヘシ朝鮮國官吏若シ之ヲ驗査セント要スレハ荷主敢テ之ヲ拒ムヲ無シ官吏亦注意驗査シテ之カ爲メ毀損ヲ致スヲ無カレ

第四則

出港セントスル積物ハ荷主第二則入港積荷届書ノ式ニ照シ船名并積物ノ品書個數ヲ書記シ朝鮮國官廳ニ届出ヘシ官廳ハ速ニ之ヲ許可シ出港積物免狀ヲ渡スヘシ荷主免狀ヲ得ハ本船ニ積込ムヲ得ヘシ官廳若シ其積物ヲ驗査セント要スレハ荷主敢テ之ヲ拒ムヲ無シ

第五則

日本國商船出港ヲ要スル時ハ前日正午前ニ朝鮮國官廳へ報知スヘシ官廳報ヲ得ハ嘗テ預リ置キタル證書ヲ還附シ出港免狀ヲ渡スヘシ

チ

日本國郵便船ハ成規ノ時限ニ拘ハラシテ出港スルトモ必ス官廳ニ報知スヘシ

第六則

嗣後朝鮮國諸港口ニ於テ糧米及雜穀トモ輸出入スルヲ得ヘシ

第七則

港稅

連桅檣ノ商船及蒸氣商船稅金五圓

單桅檣ノ商船稅金貳圓 荷物五百石以上積

單桅檣ノ商船稅金壹圓五十錢 荷物五百石以下積

俱ニ附屬脚艇ヲ除ク

日本國政府ニ屬スル諸船舶ハ港稅ヲ納レズ

第八則

朝鮮國政府或ハ人民諸物品ヲ不開港場ノ口岸ニ運輸セント欲スル時ハ日本國商船ヲ雇入ル、コヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ニ照シテ雇

役スヘシ

第九則

日本國船隻若シ通商ヲ許サ、ル朝鮮國ノ港口ニ到リ私ニ賣買ヲ爲スナ該地方官見届タル時ハ最寄管理官ニ引渡スヘシ管理官ハ其所得ノ錢物一切ヲ取上ケテ朝鮮國官廳ニ交付スヘシ

第十則

鴉片煙販賣ヲ嚴禁ス

第十一則

兩國現ニ定ムル規則ハ今後兩國商民貿易形況ニ依リ各委員時ニ隨テ事情ヲ酌量シ商議改正スルヲ得ヘシ此カ爲メ兩國委員各調印シテ即日ヨリ遵行セシム
大日本國紀元二千五百三十六年明治九年八月廿四日

理事官外務大丞官本小一 印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子七月初六日

チ

講修官議政府堂上趙寅淵 印

○明治十五年十一月二十二日第五十四號布告

今般朝鮮國ト別紙ノ通修好條規續約ヲ訂定交換ス

右奉 勅旨布告候事

別紙

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル

大日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス大日本國辦理公使花房義質及大朝鮮國全權大臣李裕元全權副官金宏集ヲ以テ雙方全權委員ト爲シ明治十五年八月三十日朝鮮國濟物浦ニ於テ大日本國ト大朝鮮國トノ間ニ取結ヒシ修好條規續約書ヲ朕親ラ閱覽セシニ能ク朕カ意ニ適シ更ニ間然スヘキナシ故ニ凡テ其約書條款ニ掲クル本趣ハ朕茲ニ之ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百四十二年

明治十五年十月三十一日東京官中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國 璽

奉 勅 外務卿正四位勳一等井上 馨

別紙

大日本國辦理大臣花房義質ト大朝鮮國全權大臣李裕元副大臣金宏集ト明治十五年八月三十日朝鮮國四百九十一年七月十七日仁川府濟物浦ニ在テ商訂シタル追加條約ヲ今兩國ノ批准ヲ經テ大日本國外務卿井上馨ト大朝鮮國特命全權大臣兼修信使朴泳孝副大臣金晚植ト東京ニ於テ互ニ相查照シ以テ之ヲ交換シ各名ヲ署シ印ヲ鈐シ以テ證トナス

大日本國明治十五年十月三十一日

大日本國 外務卿 井上 馨

大朝鮮國開國四百九十一年九月二十日

大朝鮮國特命全權大臣兼修信使朴泳孝

チ

大朝鮮國 副大臣 金晚植

日本國ト朝鮮國ト嗣後益々親好ヲ表シ貿易ヲ便ニスル爲メ茲ニ續約ニ款ヲ訂定スルコト左ノ如シ

第一

元山釜山仁川各港ノ開行里程今後擴メテ四方各五十里ト爲シ朝鮮二年ノ後ヲ期シ條約批准ノ日ヨリ周歲 更ニ各百里ト爲ス事
今ヨリ一年ノ後ヲ期シ楊花鎮ヲ以テ開市場ト爲ス事

第二

日本國公使領事及ヒ其隨員眷從ノ朝鮮内地各處ニ遊歴スルヲ任聽スル事
遊歴地方ヲ指定シ禮曹ヨリ證書ヲ給シ地方官證書ヲ驗シ護送ス
右兩國全權大臣各々諭旨ニ據リ約ヲ立テ印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒ二ヶ月ノ内
日本明治十五年十月 日本東京ニ於テ交換スヘシ
朝鮮開國四百九十一年九月 大日本國明治十五年八月三十日

十六年十一月號布告
ヲ以テ行ハル者ノ處罰
方ヲ定ム察照スヘシ

大朝鮮國開國四百九十一年七月十七日

日本國辦理公使花房義質 印

朝鮮國全權大臣李 裕元 印

朝鮮國全權副官金 宏集 印

○明治九年十月十四日第百二十八號布告

從前朝鮮國貿易ノ儀ハ對馬國人民ニ限取引イタサセ候處本年三第三十四號布告修好條規及今般第百貳拾七號布告修好條規附錄并貿易規則ノ趣旨ニ遵ヒ一般ノ人民同國釜山港へ渡航セント欲スル者ハ差許サレ候條海外行免狀又ハ航海公證ヲ使府縣廳又ハ其支廳ヨリ申受渡航可致候尤旅行先ヨリ急ニ渡航セント欲スル者ハ本人ヨリ其實籍ヲ明白ニ書記シ旅行先地方ノ廳へ願出許可ヲ受ヘク候此旨布告候事
但釜山港ノ外開港ノ場所ハ追テ確定ノ上尙可布告事

チ

○明治十三年一月廿八日第二號布告

明治九年二月我國ト朝鮮國トノ間ニ取結ヒタル修好條規第五款ノ旨趣ニ遵ヒ兩國人民通商ノタメ朝鮮國ニ於テ開クヘキ二港ノ内咸境道元山津ヲ明治十三年五月一日ヨリ開港相成候條此旨布告候事

但右期月ヨリ渡航ノ者ハ明治九年^十第百二十八號第百二十九號布告ノ通可相心得事

○朝鮮釜山浦ヘノ郵便稅額當分内地同様トス

○明治九年十一月二十二日第百四十四號布告

朝鮮國釜山浦ヘノ郵便物ハ當分本邦内地同様ノ稅額ニ相定候條此旨布告候事

○鳥獸獵規則

○明治十年一月廿三日第十一號布告

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

別紙

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス

第二條 銃獵免狀ナキモノハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除クカタメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ内務省其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若シクハ授受スル

チ

十四年四月十三號布告ヲ以テ本則中内務大臣ノ文字ヲ改ム

十四年六月十一號布告ヲ以テ廢止改ム

ヲ禁ス

第五條 免狀ヲ願受ル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ

- 一 職獵稅 金壹圓
- 一 遊獵稅 金拾圓

第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府下ニ於テハ内務省其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト雖モ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ

- 一 拾六歳未滿ノ者
- 一 白痴瘋癲等ノ者
- 一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス

- 一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所

十四年十一月號布告
トアルヲ以テ農商務省
改ム

十年八月十五號布告
ヲ以テ本條ヘ但書
ヲ追加ス

一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所

一 禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃貳挺ヲ交叉シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ

一 作物植付ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ受タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス

但地方ノ景況ニヨリ已ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ内務省ヘ届出ヘシ

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

子

十年八十五號布告
ヲ以テ第十八條ヲ
追加ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帶スヘシ出獵中警察官吏區戸長村役人等免狀ヲ看ント請フ者アル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル時ハ第八條所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五十圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期內銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ證據ヲ取り訴出ル時ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラス二十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

○明治十年十二月十七日第八十五號布告

十五年八月號布告
以テ開拓使ヲ廢シ
テ九年一月號布告
ヲ以テ廢シ北海道
廳ヲ全上ク

本年^一十一月^一號布告鳥獸獵規則第九條へ但書同第十八條左ノ通追加候條此旨
布告候事

第九條

一 獵銃ハ云々

但開拓使管内ニ限り和銃玉目十匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ

第十八條

一 開拓使管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ

○明治十四年九月十三日第四十三號布告

明治九年^六月^六第八十二號同十年^一月^一第十一號同年^二月^二第二十四號同十一年^五月^五第八號
同年^{十二}月^{十二}第二十七號同十二年^二月^二第九號同年^五月^五第十九號布告中內務省又ハ大藏
省トアルハ農商務省ト改正內務卿又ハ大藏卿トアルハ農商務卿ト改正候條此
旨布告候事

○明治十四年十一月四日第六十一號布告

鳥獸獵規則第三條及第六條中農商務省トアルヲ更ニ警視廳ト改正候條此旨布告候事

○地租改正後買上地拂下地遺地等收稅除稅區分

○明治十年二月十三日第十八號布告

地租改正後買上地拂下地遺地等收稅除稅區分左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 民有地ヲ買上ル時其年分ノ稅ハ買上タル前月分迄月割ヲ以テ收入スヘシ

第二條 官有地ヲ拂下ル時其年分ノ稅ハ拂下タル翌月分ヨリ月割ヲ以テ收入スヘシ

第三條 民有地ヲ官ノ許可ヲ得テ川溝溜池道路堤塘敷等ノ遺シ地トナス時其年分

十五年三十五號布告
以テ廢止
正ス

ノ稅ハ遺シ地トナスノ許可ヲ得タル前月分迄月割ヲ以テ收入スヘシ

○明治十五年七月廿八日第三十五號布告

明治十年^二第十八號布告第三條左ノ通改正ス

第三條

民有地ヲ官ノ許可ヲ得テ川溝溜池道路堤塘敷其他遺シ地トナス時ハ工事著手ノ月ヨリ除稅スヘシ一旦著手スルモ若シ工事ヲ中止シテ六ヶ月ニ及フモノハ工事ヲ施シタル部分ヲ除キ其中止間ハ除稅ノ限ニアラス
但七ヶ月以上ニ涉ルヘキ工事ハ六ヶ月毎ニ其工程ヲ量リ除稅ノ區域ヲ定ムルモノトス

十七年七號布告ヲ
以テ廢止

○地租田方ニ限リ願ニヨリ當分半額代米納ヲ許ス

チ

○明治十年十一月廿二日第八十號布告

地租金ノ内田方ニ限り當分人民ノ情願ニ任セ半額其府縣ノ地租改正ニ用ヒタル相場ヲ以テ代米納差許候條此旨布告候事

○地所賣買讓渡等ノ節地券面ニ餘白アルモノハ裏書シテ証認ス

○明治十二年二月十日第六號布告

地所賣買讓與等ノ節ハ總テ地券書換下ケ渡スヘキ成規ノ處自今其券狀餘白アルモノハ管轄廳ニ於テ其裏面ヘ確認ノ證ヲ記シテ下ケ渡スヘシ此旨布告候事
但證印稅ノ儀ハ從前ノ通

十四年三十號布告
アリ以テ証印稅改正
アリ參照スヘシ

○地方稅規則

○明治十三年四月八日第十六號布告

明治十一年七月第十九號布告地方稅規則左ノ通改正候條此旨布告候事

第一條 地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス

一 地租五分一以內

一 營業稅并ニ雜種稅

一 戶數割

第二條 營業稅雜種稅ノ種類及制限ハ別段ノ布告ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如シ

一 警察費

一 河港道路堤防橋梁建築修繕費

一 府縣會議諸費

一 衛生及病院費

一 府縣立學校費及小學校補助費

十三分以テ中地
租五分一以內ト
改定ス

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

十五年二號布告
以テ本條中ノ則ル

チ

十四年五號布告ヲ以テ本條第十二項ノ次へ地方稅取扱費ノ一項ヲ追加ス十四年五號布告ヲ以テ本條第十三項ヲ改正ス

一 郡區廳舍建築修繕費
 一 郡區吏員給料旅費及廳中諸費
 一 救育費
 一 浦役場及難破船諸費
 一 管内限リ諸達書及揭示諸費
 一 勸業費
 一 戸長以下給料及戸長職務取扱諸費
 以上費目互ニ流用スルヲ許サス
 一 豫備費 豫算外ニ生シタル不足ニ充ツヘキモノヲ云
 各町村限及區限ノ入費ハ其區内町村内人民ノ協議ニ任セ地方稅ヲ以テ支辨スルノ限ニアラス

第四條 其年七月ヨリ翌年六月迄ヲ一週年度トナシ府知事縣令ハ其年二月迄ニ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算並地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額トナ

十四年五號布告ヲ以テ本條中へ其急施以下刪除十五年六十九號布告ヲ以テ本條へ第二項ヲ追加ス

十四年五號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス
十四年五號布告ヲ以テ本條ヲ刪除ス
十三年式拾六號布告ヲ以テ第十條ヲ追加シ十四年八號布告ヲ以テ廢止ス

シ其府縣會ノ議決ヲ取り其年五月ヲ以テ内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ

第五條 非常ノ費用ハ 豫算ニ立ツルヲ得サル天災時變ノ費用豫備費ヲ以テ給足セサルモノヲ云 別ニ賦課スルヲ得ルト雖モ其府縣會ノ議決ヲ取り内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ其急施ヲ要スル事項ハ府縣會ニ付セス便宜施行シテ後報告スルヲ得此場合ニ於テハ之ヲ其後開ク所ノ府縣會ニ報告スヘシ

第六條 地方稅徵收ノ期限ハ府知事縣令適宜ニ之ヲ定ムヘシ

第七條 府知事縣令ハ毎年七月ニ至リ其一周年度間ノ出納ヲ計算シ精算帳及計表ヲ制シテ内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ且翌年通常會議ノ初メニ於テ之ヲ府縣會ニ報告スヘシ

第八條 府縣會若シ豫算ノ議案ヲ議定セサルカ又ハ議案ヲ議定スルニ及ハスシテ内務卿ヨリ閉會若クハ解散ヲ命シタルキハ府知事縣令ノ具申ニ依リ内務卿ハ前年度ノ豫算額ニ據テ徵收セシムルヲ得

第九條 嶋嶼ノ地方稅ニ係ル經費ハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ内務卿ニ

チ

具狀シ其裁定ヲ得テ本屬府縣ノ經費ト之ヲ分別スルヲ得

○明治十三年十一月五日第四十八號布告

今般歲計ヲ節約シ紙幣銷却ノ元資ヲ増加シ併セテ地方ノ政務ヲ改良スルノ要用ナルヲ察シ左ノ通制定布告候事

第一條

本年^四月第十六號布告第一條地方稅目中「地租五分一以內」トアルヲ「地租三分一以內」ト改定ス

第二條

同上布告第二條地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目中左ノ三項ヲ增加ス

- 一 府縣廳舎建築修繕費
- 一 府縣監獄費
- 一 府縣監獄建築修繕費

十五年二號布告ヲ以テ第三條ヲ改正ス

十四年十號布告ヲ以テ(地方稅)以下十一字ヲ刷ル

第三條

地方稅ヲ以テ支辨スヘキ府縣土木(即チ河港、道路、堤防、橋梁、建築修繕)費官中費下渡金ハ來ル十四年度ヨリ廢止トス

○明治十四年二月十四日第五號布告

地方稅規則中左ノ通追加刪除候條此旨布告候事

第二條第二項改正

一 土木費

府縣ニ屬スル河港、道路、堤防、橋梁、建築修繕等ノ費用及區町村ニ屬スル同上ノ補助費

同條第五項改正

一 教育費

府縣ニ屬スル教育ノ費用及區町村立學校ノ補助費

同條第十二項

戶長以下給料云々ノ次へ追加

一 地方稅取扱費

爲換方給料爲換手数料現金遞送等ノ費用

同條第十三項改正

十五年二號布告ヲ以テ第三條ヲ改正ス

一 豫備費

豫算外ニ生シタル事件
ノ費途ニ充ツヘキモノ

第五條中(其急施ヲ要スル事項云々)以下删除

第七條改正

府知事縣令ハ一週年間ノ出納ヲ計查シ精算帳及計表ヲ製シ翌年通常會議
ノ初メニ於テ之ヲ府縣會ニ報告シ然ル後内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ

第八條删除

○明治十四年二月十四日第十號布告

明治十三年^{十一月}第四十八號布告第三條中(地方稅ヲ以テ支辨スヘキ)ノ十一字
删除候條此旨布告候事

○明治十五年一月二十日第二號布告

明治十三年^{四月}第十六號布告地方稅規則中左ノ通改正明治十五年七月一日ヨリ
施行ス

第二條 (種類)ノ下(及制限)ノ三字ヲ削ル

第三條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如シ

一 警察費

一 警察廳舍建築修繕費

一 土木費

一 區町村土木補助費

一 府縣會議諸費

一 衛生及病院費

一 教育費

一 區町村教育補助費

一 郡區廳舍建築修繕費

一 郡區吏員給料旅費及廳中諸費

一 救育費

十六年七月號布告ヲ
以テ郡區長ノ權給
等ノ十六年度ヨリ國
庫ノ支辨トス

十七年十三號布告
スヲ以テ本項ヲ改正

十五年六十九號布告
正スヲ以テ本項ヲ改正

一 浦役場及難破船諸費
 一 諸達書及揭示諸費
 一 勸業費
 一 戸長以下給料及戸長職務取扱諸費
 一 地方稅取扱費 府縣廳ニ屬スル爲換方給料爲
換手數料現金遞送等ノ費用
 一 府縣廳舍建築修繕費
 一 府縣監獄費
 一 府縣監獄建築修繕費
 以上費目互ニ流用スルコトヲ許サス
 一 豫備費 豫算外ニ生シタル事件
ノ費途ニ充ツヘキモノ
 右ノ外特ニ費目ノ増加ヲ要スルトキハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令
 ヨリ内務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ

右奉 勅旨布告候事

チ

○明治十五年十二月二十八日第六十九號布告
 明治十三年^四月第十六號布告地方稅規則中左ノ通追加改正ス

第三條 二十項
 一 豫備費 豫算外ニ生シタル事件ノ費途
及豫算ノ臨時不足ニ充ル者

第四條 二項
 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事件數年ヲ期シテ施行スルモノハ初年ニ於テ其
 年期間各年度ノ經費豫算ヲ定メ府縣會ノ議決ヲ取り府知事縣令ヨリ内務
 卿ニ具狀シ認可ヲ得テ其年期間之ヲ施行スルコトヲ得

第五條 二項
 前年度經費決算ノ場合ニ於テ已ムヲ得サル事故アリテ費目中不足ヲ生ス
 ルモノアルトキハ府知事縣令ハ府縣會ノ議決ヲ取り其補充費ヲ徵收スル
 コトヲ得

右奉 勅旨布告候事

○明治十六年二月二十一日第七號布告

郡區長ノ給料及旅費ハ來ル十六年度以後國庫ヨリ支辨ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十七年五月七日第十三號布告

明治十三年^四月^四第拾六號布告地方稅規則第二條第拾五項左ノ通改正シ十七年度

ヨリ施行ス

一戸長以下給料旅費

右奉 勅旨布告候事

○明治十七年六月十二日第二十二號布告

本年^五月^五第拾三號布告ヲ以テ地方稅規則第三條第十五項改正候處同布告發行以

前既二十七年度地方稅豫算高ヲ決定シタル府縣ニ於テハ特ニ臨時府縣會ヲ開

カス常置委員ノ議決ヲ取り之ヲ施行スルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

○明治十七年十二月八日第二十九號布告

明治十三年^四月^四第拾六號布告地方稅規則第四條一項左ノ通改正シ明治十九年度

ヨリ施行ス但明治十八年度ハ明治十八年七月ヨリ翌年三月マテ九箇月ヲ以テ

一周年度トス

其年四月ヨリ翌年三月迄ヲ一周年度トナシ府知事縣令ハ前年十月迄ニ地方

稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算并地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額ト

ナシ其府縣會ノ議決ヲ取り其年二月ヲ以テ内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ

右奉 勅旨布告候事

十四年三十六號布
告ヲ以テ十五年一
月一日ヨリ施行ト
ス

○治罪法

○明治十三年七月十七日第三十七號布告

治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事

別冊

治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第二編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第一節 告訴及ヒ告發

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

子

十四年七月三十一日
法律中無
告ヲ以テ本法中無
能者、法律ニ定
タル代、民事
ヲ當事人ト稱スル者
ヲ説明ス

- 第三節 證據
- 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
- 第五節 檢證及ヒ物件差押
- 第六節 證人訊問
- 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- 第四章 豫審上訴
- 第四編 公判
- 第一章 通則
- 第二章 違警罪公判
- 第三章 輕罪公判

治罪法

- 第四章 重罪公判
- 第五編 大審院ノ職務
- 第一章 上告
- 第二章 再審ノ訴
- 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
- 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
- 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦
- 第一章 裁判執行
- 第二章 復權
- 第三章 特赦

子

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、ル場合ハ此限ニ在ラス又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公

訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五大赦

六期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲

シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其

最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續

ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發

覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日

ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二

倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期

滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其

手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人

告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損

チ

害ノ償ヲ要ムルヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スル

ハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十二條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル

チ

十五年七月布告ヲ以テ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フトス

時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取りタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取りタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

十四年四月十六號
官署ノ印ヲ用フルニ
ノ制限ヲ當分本條
不及トス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載

シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルヲ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

チ

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ牴觸スル規則ハ此限ニ在ラス
從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

十八年十二號布告
ヲ以テ便宜法ヲ定
ム参照スヘシ

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ス
第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第二十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第二十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

- 一 犯罪ヲ搜索ス
- 二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス
- 三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス
- 四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第二十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第二十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第二十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第二十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

- 一 違警罪ハ違警罪裁判所

チ

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シ

タル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナ

リトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シ

十四年四月十六號布告ヲ以テ當分ノ内
於テ被告人逮捕ノ地ニ
トス

タル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ

最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若ク

ハ法律上逮捕スルコト許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

チ

第四十五條 外國ニ在テシ犯タル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地

ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判

ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ

權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヲ得

第二章 違警罪裁判所

十四年六十五號布告
以テ豫審規則ヲ定ム

十八年三十號布告
以テ豫審罪即決例ヲ制定ス

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事

ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁

判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

十四年五十四號布告
以テ治安裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

十四年五十六號布告
以テ治安裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

チ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名

ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ

十五年二十三號布告以下ハ司法警察ノ職務ヲ行ハシム

犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第二編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨ

リ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルヲアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見ヲ

チ

ル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ
裁判ス但其裁判ハ判事二名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間
之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行
ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長トナルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ
第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警

十八年二月公布
以テ輕罪控訴規則
ヲ定メ之ニ依リ
ル本法中ノ條件當
分施行セストス

察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルヲアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ
差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時
ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得

チ

テ臨時開廳スルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ

充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

十六年三號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年四號布告ヲ以テ當分本項ノ便

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ

十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便
十四年五十五號布告ヲ以テ當分本項ノ便

チ

十六年四月十九號布
告ヲ以テ本條ノ事
件ニ付高等法院
開カサルハ通判
法所ニ於テ裁
判スルヲ得トス

差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記スヘシ

第七章 高等法院

第八十二條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以

テ之ヲ命ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百二十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百二十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スル

チ

コアルヘシ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アル
コトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以
下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被
告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得
豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

チ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ
得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ
又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルコトヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人
ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其
旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリ
ト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ
告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト

爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニアラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルヲ得此場合ト雖モ

第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルヲアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

十四年四月十六號
告テ以テ其動行
人ト思料スヘキ者
アルトハ當分現行
犯ニ准スルヲ得ト
ス

第一百條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレ、時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヲ得

第一百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第一百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問

テ

及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第一百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第一百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スヲ得

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第一百七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第一百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知スヘシ

第一百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

チ

第一百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

第一百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得
被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第一百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第一百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第一百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、ル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第一百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送

チ

致テ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第一百七七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヲ得

第一節 令狀

第一百八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少トモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ

過クルヲ得ス

第一百九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得

第二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得

一被告人定リタル住所アラサル時

二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ゲントスルノ恐アル時

第二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

十四年五月十九號
告ヲ以テ訊問時間
ノ夜中留置方ヲ示
ス

チ

第二百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知スヘシ

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第二百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ隨ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ概要及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概要
- 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
- 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

チ

第二百二十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召

喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第二百二十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人
又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第二百二十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正
本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルヲアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於
テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第二百二十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ
潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會
ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

十四年四月十六號布
告ヲ以テ芝居等ハ
本項制限ノ外トシ
其制限ヲ所ス

巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名
捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス

第二百二十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知り又ハ潛匿シ
タリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシ
ムルヲ得

巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執
行ヲ求ム可シ

第二百二十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ各控訴裁判
所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシ
ム可シ

第二百二十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀

チ

ヲ示ス可シ長官ハ已ムヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應
セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百二十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監
倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヲ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致ス
ルヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ
第三百二十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能
ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ
第三百二十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時
ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第三百四十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ
其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之
ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヲ得

第三百四十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタ
ル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ
豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第三百四十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ
第二節 密室監禁

第三百四十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監
禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第三百四十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審
判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スル
ヲ許サス

チ

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ナシ
テ之ヲ給與セシム

第四百四十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ
得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル
可シ

第三節 證據

第四百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナ
シ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑
ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百四十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百四十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ
書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要
ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺
印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百四十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問
スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用
フ可カラス

千六年八月號布告
以テ當分ノ内書記
ノ立會ヲクシテ訊
問スルコトヲ得ト
ス

チ

第五百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ヲキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第五百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ中立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第五百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第五百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第五百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第五百五十一條第五百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第五百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞セ之ニ署名捺印セシム可シ

第五百九十二條第五百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

チ

第四百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ
被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差
押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔
任ス可シ

第四百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時
ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第四百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ
疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル
時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第四百二十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第四百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシム
ルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必
要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立
會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第四百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第四百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ
差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第四百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其
物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第四百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトス
ル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ
第四百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

チ

第四百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシ

テ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第四百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地

ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第四百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官

署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ

者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可

シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第四百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者

ヲ呼出ス可シ

十四年四月十六號布告ノ以テ豫審判事ニ囑託スルヲ得

十六年八月號布告ノ以テ豫審判事ニ囑託スルヲ得

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可

シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ

之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヲ得

得

第四百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三

條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス

可シ

第四百七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安

判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ

囑託スルヲ得

十四年四月十六號布告ノ以テ豫審判事ニ囑託スルヲ得

チ

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ

對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直ニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ證人ナシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケタルコト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハザリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ナシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キコトヲ

チ

宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

チ

第八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第八十六條 第五十六條第五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載ス可シ

第八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減センヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人

十四年六月十七號布告刑罰部參照

署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發

チ

スルヲ得ス

第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取りタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ
鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

チ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ

得但罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ
第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ
若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ

十四年四月十六號布
告ヲ以テ當分現行
犯ノ場合ニ限リ令
狀ヲ發スルヲ得ト
ス

十五年五月十三號布
告ヲ以テ訊問時限
ハ不得止場合ニ於
テハ當分五日以内
ニ於テスルヲ得ト
ス

全上

チ

爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ
第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘
ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕
罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ
檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ
許スヲ得

被告人ノ無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審
判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又

ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ
差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證
金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可
シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡
ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ

チ

言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調

十四年四十七號布告ヲ定ム

ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付スヘシ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

二 被告事件罪トナラサル時

三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ經タル時

子

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サルハ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言

渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ

爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放

ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ

爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタ

ル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其

理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪トナラサルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其

理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模

樣證據ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明

示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人

ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障

テ

ヲ爲スヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百二十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百二十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヲ得

第二百二十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百二十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

チ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後
上告ヲ爲スヲ得

第二百二十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至
ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヲ得

- 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
- 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
- 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂

ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百二十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意
書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内
ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置
シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百二十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲ス
ヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ
故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヲ得ス
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヲ
得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百二十七條ニ定メタル原由アルヲ認メ又ハ
回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更
ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因

チ

リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得
第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ
之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ
自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得
檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申
立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得
民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲
スヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得輕罪裁判所又ハ違警
罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ
裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起
算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差
出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ
故障ヲ爲スヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日
内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマ
テ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止
セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ
第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百二十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヲ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キ
一 及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヲナカル可シ

第二百五十九條 第二百一十一條ヨリ第二百十二條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命

テ

ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヲナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサレ時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヲナシ但守卒ヲ置クヲアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルヲ得若シ出廷シテ辯論スルヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

チ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判

長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲

ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヲナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫

審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヲ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルヲ能ハサルノ事由ヲ證明スルヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヲ得

チ

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル

爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百二十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ

チ

忌避ノ申立ヲ爲スヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百二十八條ヨリ

第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後

ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫

審中管轄官吏ノ作りタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得
是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人ト

シテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許
ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出ヲ受
ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴
訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

チ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得
 第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得ス
 陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得
 訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得
 第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
 其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得
 第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
 一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料
 二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金
 被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス
 第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ
 其言渡ヲ受ケタル者二日內ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所開廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ
 第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又

チ

ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人翼者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係

人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第二百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

チ

第二百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ナシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ

本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案

ノ辯論ヲ停止ス

第二百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示

シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第二百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキヲ

ヲ明示ス可シ

第二百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲ス

ヲ得

第二百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ

全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第二百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品

ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決ア

ルマテ裁判執行ヲ停止ス

第二百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非

サレハ上訴ヲ爲スヲ得

第二百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監

獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第二百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタ

チ

ル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲スコシ

第二百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲スコシ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第二百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲スコシ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印スコシ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載スコシ

第二百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付スコシ

第二百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載スコシ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第二百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載スコシ

チ

- 一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由
- 二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述
- 三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由
- 四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決
六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第二百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ
辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ
檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第二百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ二日內ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署

名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第二百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第二百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
- 二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第二百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載

チ

ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第二百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲ得

第二百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第二百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第二百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

ヲ問フ可シ

官吏ノ作りタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第二百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第二百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第二百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢

査

察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第三百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百二十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百二十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第二百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又關席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第二百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第二百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第二百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第二百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヲ得ス

第二百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二百四十五條 第二百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第三章 輕罪公判

第二百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第二百四十八條 呼出狀ニ付テハ第二百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第二百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第二百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第二百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被証人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第二百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヲ得

第二百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス

チ

可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百二十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第二編第二章ニ定メタル規則ニ

從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第二以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

チ

第二百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲スコシ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲スコシ

第二百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヲナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲スコシ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコシ

第二百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコシ

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコシ

第二百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スコシ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第二百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スコシ

關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ

チ

直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第二百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第二百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第二百六十八條 第二百二十九條ヨリ第二百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第二百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第二百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四章 重罪公判

第二百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
- 二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第二百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第二百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
- 二 被告人ノ氏各年齢身分職業住所出生ノ地
- 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

チ

四罪各法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第二百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第二百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第二百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第二百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委員ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達ア

リタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第二百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第二百八十條 書記ハ第二百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可

チ

十五年一號布告
以テ裁判所ニ屬シテ
辯護人トシテ
ハ當分ノ言渡
ハモ刑ノ言渡
ハ有

シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルコトアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコト得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルコト得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコト得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコト得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ

檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコト得ス但對手人ヨリ異議ナキコト申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコト得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコト得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

チ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏各年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲スコシ

第二百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第二百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヲ被告人ニ告知スコシ

第二百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問スコシ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラズ

第二百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ

付辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知スコシ

第二百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第二百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニアラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヲ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スコヲ得

第二百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スコヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ

チ

告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第二百九十六條 裁判長ハ第二百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第二百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第二百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論スルヲ得

第二百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得
檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第二百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

チ

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫

審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

チ

二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトシ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時
十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可

シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取りタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取りタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取りタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テ

モ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ハ差出シ且意見アル時ニ之ヲ添フ可シ
檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿册ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出ス可キヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セザル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審

チ

院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ
代理人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事長及ヒ代理人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代理人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判
決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ヲシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ
爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原

由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲
ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヲニ
因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヲナク大審院ニ於テ直チニ裁判
言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヲアリト雖モ其後ノ手續ニ利
害ヲ及ボサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヲナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ
第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ
部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直
チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時
ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス

チ

可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事
件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百二十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ
上告ヲ爲ス可キ得

第四百二十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重

キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタ
ル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告
ヲ爲ス可キ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス
可シ

第四百二十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係
人ヨリ其院ニ哀訴スル可キ得

一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付判決ヲ爲サ、ル時

三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百二十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ二日內ニ書記局
ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取りタルヨリ三日內ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期
限內ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ二日間又哀訴アリタル
時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百二十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ
利益ノ爲メ之ヲ爲ス可キ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲ス可キ得ス

- 一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認
メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時
 - 二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
 - 三犯罪アル以前ニ作りタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヲ證明シ
タル時
 - 四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
 - 五公正ノ証書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルヲ證明シタル時
- 第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヲ得可キ者左ノ如シ
- 一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官
 - 二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長
 - 三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ
 - 四刑ノ言渡ヲ受ケタル者
 - 五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及
ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ
原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項
ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其
取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ
專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破
毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナ

ル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ間ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得

大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類

ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維

テ

持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス
ヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟
關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナ
クシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通シ原裁
判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書
ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可
シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴

訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カ
ラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差
出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判
所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徴收ス可シ

チ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏各年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所

ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ
裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

チ

第二章 復権

第四百七十條 復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡
ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復権ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可
シ

第四百七十一條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判言渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ
添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書
ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト
認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復権ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿
ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所
檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ
更ニ其願ヲ爲スヲ得ス

更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復権ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事
長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

チ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ

檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

○明治十四年七月八日第三十六號布告

刑法治罪法來明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

○明治十四年九月二十日第四十六號布告

書類送達ニ付治罪法第廿四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

○ 治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十二條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

○ 治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルヲ得

○ 治罪法第二百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ラス搜索致シ苦シカラス

○ 治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラス
右布告候事

○明治十四年九月二十日第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從テ可シ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○明治十四年十月六日第五十四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續ニ付テハ上訴ヲ許サス

○明治十四年十月六日第五十五號布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

○明治十四年十月七日第五十六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違警罪裁判所始審裁判所即チ輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄

ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○明治十四年十月七日第五十七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フ可シ

○明治十四年十月八日第五十九號布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○明治十四年十二月二十八日第七十一號布告
 治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事
 ノ職務ヲ代理セシム
 右奉 勅旨布告候事

○明治十四年十二月二十八日第七十三號布告

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ
 通

- 無能力者
- 一 未丁年者
- 二 妻タル者
- 三 白痴瘋癲人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

右奉 勅旨布告候事

十六年二十號
戶部江田邊
支山平
支山平

○明治十四年十二月二十八日第七十七號布告

本年^十月第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但書ノ通タルヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十四年十二月二十八日第七十九號布告

各裁判所ノ位置及管轄區畫ノ儀本年^十月第五十二號ヲ以布告候處北海道^{函館始}所管内^{審裁判}并ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續

十五年十四號
北道ニ司法
所管内
年管轄布告
ニ號布告
ヲ以テ
テ六

令中改ス故ニ
一字ハ海以下
十五年三十三
告ハ分同縣重

モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ

但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十四年十二月二十八日第八十二號布告

大審院各裁判所ニ於テ明治十四年十二月三十一日以前審理ニ着手セシ刑事ハ十五年一月一日以後ト雖モ治罪法ニ拘ラス仍ホ從前ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十五年一月九日第一號布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカルヘシト有之候得共其裁判所々屬ノ代官人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

チ

右奉 勅旨布告候事

○明治十五年二月一日第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フル
モノト定ム

右奉 勅旨布告候事

○明治十五年三月三日第十六號布告

樺戸集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁
判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉 勅旨布告候事

十八年三十三號布告ニ依リ但書消スル

○明治十五年五月十三日第二十三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡查ト同シ
ク司法警察ノ事ヲ行ハシム

右奉 勅旨布告候事

○明治十五年六月廿日第三十號布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之
ヲ審訊シ証憑擬律案ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十五年七月八日第三十二號布告

明治十四年十二月第七十八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管内重
罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ証憑擬律案ヲ具ヘ長崎控訴裁判所

十八年三十三號布告ヲ以テ自今札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪案件ハ沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ証憑擬律案ヲ具ヘ長崎控訴裁判所

ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲナスコトヲ得
右奉 勅旨布告候事

○明治十五年八月十二日第四十一號布告

空知集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁
判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス
右奉 勅旨布告候事

○明治十五年十一月十三日第五十三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テ
ハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

十八年三十三號布
告ニ依リ但書消スル

十八年三十三號布
告ヲ以テ札根室
始審裁判所ニ自今
故重罪裁判所ハ
以下六字ハ但書
消スル

○明治十六年一月十日第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以テ其裁判
長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ従前ノ通タル可シ
右奉 勅旨布告候事

○明治十六年三月七日第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證
人ヲ訊問スルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

○明治十六年十二月二十八日第四十九號布告

チ

治罪法第八十二條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得
右奉 勅旨布告候事

○明治十八年一月六日第貳號布告

明治十四年^{十二月}第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條 控訴ハ治罪法中本案ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシム

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十八年五月二十九日第拾貳號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所

ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人鬪毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法

司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十八年十月二十二日第三十三號布告

自今札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク但治罪ノ手續ハ當分ノ内便宜取計フヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十八年十二月十七日第四拾貳號布告

釧路集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管廳ニ屬ス
右奉 勅旨布告候事

○地租徵收期限

○明治十四年二月十七日第十四號布告

明治十年^七月^七日第五十三號布告地租徵收期限ノ儀明治十四年分ヨリ左ノ通改定候條此旨布告候事

但市街地租ノ儀ハ従前ノ通タルヘシ
地租徵收期限

一期 該年七月一日ヨリ
同 八月三十一日限

畑方及宅地山林原野牧場

五分

同

十五年廿四號布告
ス以テ但書ヲ改正ス

十八年十五號布告
ヲ以テ第三期以下
ヲ改正ス

二期 同 九月一日ヨリ
同 十月三十一日限

五分

田方

三期 同 十一月一日ヨリ
同 十二月十五日限

五分

同

四期 翌年一月一日ヨリ
同 二月二十八日限

五分

○明治十五年五月二十日第廿四號布告

明治十四年^二月^二日第十四號布告但書左ノ通改正ス

但市街宅地地租ノ儀ハ該年七月翌年一月兩期ニ其五分宛ヲ收納ス
右奉 勅旨布告候事

○明治十八年六月十五日第拾五號布告

明治十四年^二月^二日第十四號布告地租徵收期限第三期以下左ノ通改正ス

チ

三期	同	該年十一月一日ヨリ 十二月十五日限	田方	二分五厘
四期	同	十二月十六日ヨリ 翌年一月二十五日限	同	二分五厘
五期	同	一月二十六日ヨリ 三月三十一日限	同	二分五厘
六期	同	四月一日ヨリ 四月二十日限	同	二分五厘

右奉 勅旨布告候事

○地券証印稅則

○明治十四年五月廿五日第二十號布告

地券証印稅左ノ通改正明治十四年七月一日ヨリ施行シ從前ノ証印稅則ハ同日ヨリ
廢止候條此旨布告候事

証印稅則

地券ニ記セシ

券狀壹通ニ付

金高拾圓未滿

三錢

千分ノ五

金高貳百圓以上

即拾圓ニ付五錢

金高五百圓未滿

壹圓

金高千圓未滿

壹圓貳拾五錢

金高貳千圓以上

壹圓五拾錢

金高五千圓未滿

貳圓五拾錢

金高壹萬圓未滿

三圓七拾五錢

金高壹萬圓以上

五圓

左ニ掲クルモノハ券面代價ノ有無ニ拘ハラス券狀壹通ニ付三錢トス
 代換授與并ニ水火盜難ニヨリ地券書換
 荒地其他無代價地券授與書換
 荒地起返及開墾歛下年季明其他一筆地ヲ數筆ニ分裂數筆地ヲ一筆ニ合併等
 ニテ所有主變換セサル地券書換

○徵發令

○明治十五年八月十二日第四十三號布告

徵發令別冊ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

別紙

徵發令

- 第一條 徵發令ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸軍或ハ海軍ノ全部又ハ一部ヲ動かスニ
 方リ其所要ノ軍需ヲ地方ノ人民ニ賦課シテ徵發スルノ法トス
 但平時ト雖モ演習及ヒ行軍ノ際ハ本條ニ准ス
- 第二條 徵發ハ陸軍若クハ海軍官憲ノ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ
- 第三條 左ニ記列スル官憲ハ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス
- 一 陸軍卿海軍卿鎮臺司令官及ヒ鎮守府長官
 - 二 陸軍ニ於テハ特命司令官軍團長師團長旅團長分遣隊長若クハ演習及ヒ行軍
ノ軍隊長
 - 三 海軍ニ於テハ特命司令官艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦長若クハ操練及ヒ
航海ノ艦隊司令又ハ艦長
- 第四條 徵發ス可キモノ、種類ニ依リ徵發區會社モ之ニ准スヲ定ムルコト左ノ如シ
- 一 第十二條第一項ハ 府縣
 - 二 第十二條第二項及ヒ第三項ハ 郡區

チ

三 第十二條第四項以下各項及第十三條各項ハ 町村

四 船舶會社所有ノ船舶及ヒ鐵道會社所有ノ瀛車ハ 會社

第五條 徵發ス可キモノハ徵發區内ニ現在スルモノニ限ル

第六條 徵發書ハ徵發區ニ從ヒ府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ

店長ニ付ス可シ

第七條 徵發書ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ店長

ハ時期ヲ誤ルコトナク其供給ヲ完全セシムルノ責アルモノトス

第八條 各徵發區ニ於テハ臨時徵發ニ應ス可キ便宜ノ方法ヲ豫定ス可キモノトス

第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ時期ニ違フコトナク之ヲ供給スルノ義務アル

モノトス若シ其時期ニ違フトキハ府知事縣令郡區長戸長他ノ方法ヲ以テ調達シ

爲メニ生シタル費用ハ本人ヲシテ之ヲ辨償セシム但會社ニ係ルモノハ陸海軍官

憲直ニ其處分ヲ爲ス可シ

第十條 徵發ヲ課セラレタルモノ商用其他ノ事故ヲ以テ供給ヲ拒ミ又ハ供給スヘ

キモノヲ藏匿シタルトキハ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得

第十一條 供給ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ其受領証票ヲ府知事縣令郡區長戸長若ク

ハ停車場長船舶會社ノ店長ニ交付スヘシ

第十二條 徵發ス可キモノ左ノ如シ

一 米麥秣莠鹽味噌醬油漬物梅干及ヒ薪炭

二 乘馬馱馬駕馬車輛其他運搬ニ供スル獸類及ヒ器具

三 人夫

四 宿舍廐園及ヒ倉庫

五 飲水石炭

六 船舶

七 鐵道瀛車

八 演習ニ要スル地所

九 演習ニ要スル材料器具

チ

第十三條 戰時若クハ事變ニ際シテハ第十二條ノ諸項ニ掲クルモノ、外徵發ス可

キモノ左ノ如シ但平時ノ演習及ヒ行軍ニハ徵發スルコトヲ得ス

一 造船所工作所及ヒ軍事ノ工作ニ要スル材料器具

二 職工礦夫洗濯人ノ類

三 被服裝具艸鞋兵器彈藥船具寢具藥劑治療器械及ヒ綑帶具

四 水車搗春ノ類

五 病院

第十四條 第十二條第二項中徵發ノ免除ヲ受クヘキモノ左ノ如シ

一 皇族所用ノ車馬

二 外國公使館並領事館ニ屬スル車馬

三 乘馬本分タル職務ニ要スル馬匹

四 郵便用ノ車馬

五 公認セラレタル種牛種馬

第十五條 第十二條第四項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ

一 公務ニ屬スル麻署

二 皇族ノ邸宅

三 外國公使館領事館及ヒ其所屬館

四 鐵道電信郵便用ノ建造物

五 陸海軍將校并ニ同等官現住ノ家屋

六 博物館書籍館

七 病院盲啞院棄兒院

八 學校但臨戰合圍地境內ニ在リテハ此限ニ在ラス

九 製造場内機械室

第十六條 第十二條第二項ニ掲クルモノ、使用ハ其原用ヲ轉シテ他用ニ供スルヲ許サス但戰時若クハ事變ニ際シテハ此限ニ在ラス

第十七條 第十二條第二項ニ掲クルモノハ其差出場所ヨリ六里未滿ノ地ニ於テ使

用スルヲ例トシ一日ノ使用ハ六里ニ越ユルコトヲ得ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ六里以外ノ地ニ使用スルコトヲ得

第十八條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ合圍地境内ヲ除クノ外居住者ノ起臥及ヒ營業ニ必要ナル場所ヲ徵用スルコトヲ得ス但營業ニ必要ナルモ旅店等ハ此限ニ在ラス

第十九條 宿舍ノ廣狹ハ其地家屋ノ數ト隊伍ノ編制トニ從ヒ一定シ難シ故ニ臨時適宜ニ之ヲ定ム

第二十條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ陸軍若クハ海軍ノ都合ニ依リ特ニ其場所ヲ指定スルコトアル可シ

第二十一條 宿舍ヲ定メタルノ後ハ區町村ノ便宜ヲ以テ他ニ轉移セシムルコトヲ許サス厩園倉庫亦同シ

第二十二條 宿舍厩園ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ併セテ人馬ノ食飼ヲ供給ス可シ但駐軍二日以上ニ至ルトキハ第四日ヨリ食飼ハ陸軍若クハ海軍ノ自辨トス

第二十三條 第十二條第六項ノ徵發ニ係リ其乘載人馬ノ食飼ヲ要スルモノハ併セテ供給セシム

第二十四條 第十二條第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ戰時若クハ事變ニ際シ借切トシテ之ヲ徵用スルコトアル可シ

第二十五條 第十二條第二項第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ其操業者ヲ併セテ徵用スルヲ例トス但時宜ニ依リ各個ニ分別シテ徵用スルコトヲ得

第二十六條 第十二條第六項ニ掲クルモノヲ操業者ト各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル但船橋及艇船ニ充ツルモノハ此限ニアラス

第二十七條 第十二條第七項ニ屬スル瀛車其屬具鐵道建築所用ノ材料器具及ヒ操業者ヲ各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル

第二十八條 第十三條第五項ニ掲クルモノハ陸海軍病院ノ補助トシテ徵用スルヲ例トス但合圍地境内ニ在リテハ全ク明渡サシムルコトヲ得

第二十九條 徵發ニ係ルモノハ第三十一條乃至第五十條ニ定ムル所ノ方法ニ從ヒ